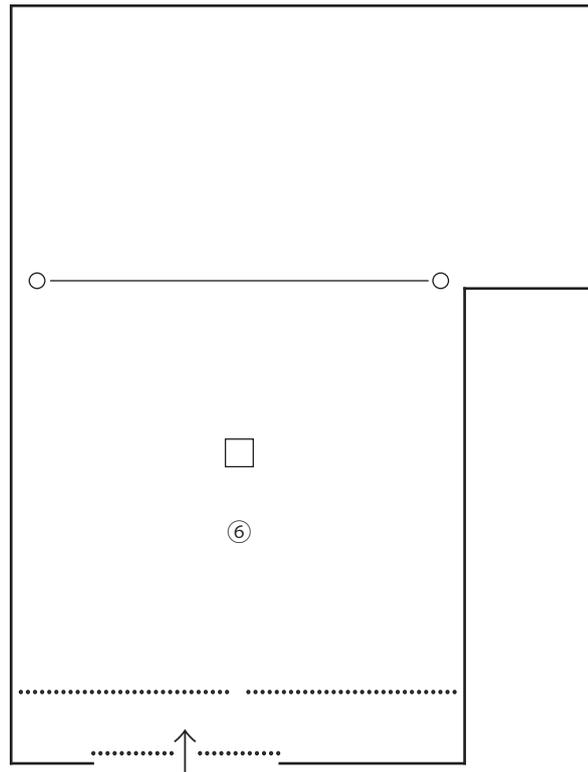
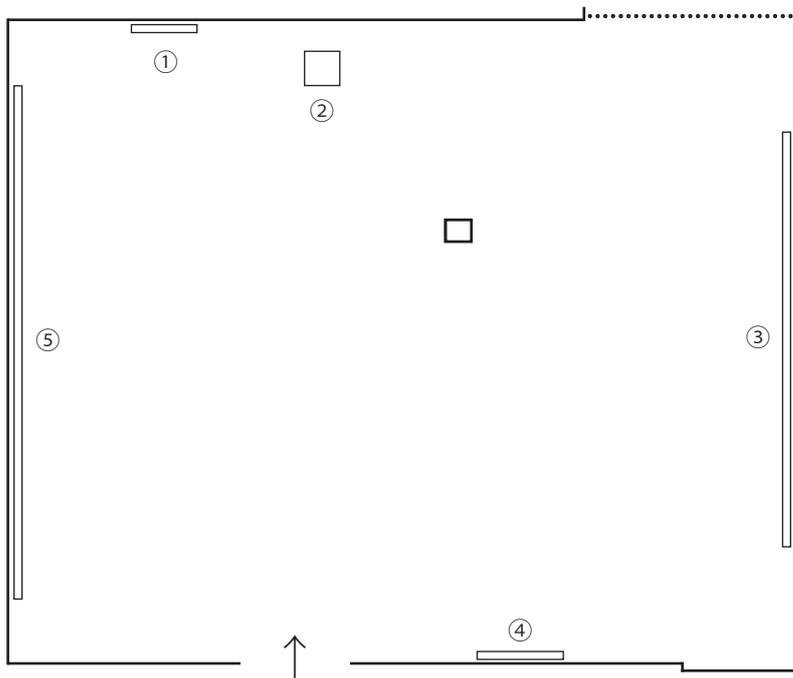


Ryohei KAN Solo Exhibition K 15-30D

場所: 広島芸術センター

期間: 2022年8月6日(土)~8月15日(月) 13:00-19:00

制作協力: 株式会社大日本塗料



【作品リスト】

- 1: K 15-30D Color Chart / 2021年 22×48mm / 塗料用標準色見本帳, 額
- 2: K 15-30D Paint / 2022年 / Φ112×H131mm / ペンキ缶, フッ素樹脂塗料
- 3: K 15-30D #3 / 2022年 / 2910×2182mm / キャンバス, フッ素樹脂塗料
- 4: K 15-30D Study 4 / 2022年 / 727×530mm / キャンバス, フッ素樹脂塗料
- 5: K 15-30D #2 / 2022年 / 3909×1904mm / キャンバス, フッ素樹脂塗料
- 6: 34°23'40.5"N 132°27'17.3"E / 2022年 / サイズ可変 / 4' 23" シングルチャンネルビデオ, QRコード

【作品解説】

2022年8月6日から8月15日の期間に広島県広島市中区の広島芸術センターで、広島市在住の美術作家 菅亮平の約3年ぶりとなる新作個展「K 15-30D」を開催します。「空虚（ヴォイド）」を主題とした創作に取り組んできた菅は、2013年以降ドイツに滞在し、世界大戦の悲劇や喪失を空白の空間をもって指示する、戦後西洋美術史におけるヴォイドの表象の系譜に関心を寄せてきました。その後2020年に広島に移住した菅は、世界で初めて原子爆弾が投下された広島を歴史性を踏まえて、アジアの戦後美術史における世界大戦への応答に関心を向け、「ヒロシマ」の表象についてのリサーチを開始するに至ります。

そうしたリサーチの過程の中で菅は、2020年から2021年に行われた第5回目となる原爆ドームの保存工事において、天蓋部分のオリジナル鋼材の補修に用いる塗料の選定に際し、被爆当時の色彩を再現する試みが初めて行われたことに着目します。その後、保存工事の経緯や関係資料の追跡調査を行った菅は、実際に保存工事で使用された塗料（K 15-30D）を入手し、2021年からその塗料を用いた絵画制作に取り組んできました。

それらの絵画作品は、原爆ドームのオリジナル鋼材の補修塗料をキャンバス一面に染み込ませて制作されています。特定の形象は描かれておらず、モノクロームの色面の中に塗料の染みや滲みがわずかに読み取れるものです。このアプローチにおいては、素材となる塗料自体が同時に作品の主題でもあるため、色材としての塗料の自律的な運動や現象を引き出すことを意図していると言えるでしょう。また、視界を覆い尽くす程に巨大なサイズで制作されるこれらの絵画は、ポスト抽象表現主義におけるカラーフィールド・ペインティングの形式を喚起させます。

本作においては、通常は地上から数十メートルの距離をもってでしか見ることのできない、原爆ドームの天蓋部分に塗られたその色彩と間近で向き合うことができます。それは、被爆直後に撮影された原爆ドームのカラー写真のデジタル解析に基づいて、非塗装のオリジナル鋼材部分を参照しな

がら緻密な分析によって決定されました。しかし、それが本当に原爆ドームの被爆直後の剥き出しの鉄の色であるかどうかは想像する他ありません。菅は、絵画を通して鑑賞者に色彩そのものと向き合うことのできる状況を提示し、歴史を遡って当時の出来事に想像を巡らせる契機となるような場を創出しているのです。

もう一方の展示室の映像インスタレーション作品《34° 23'40.5"N 132° 27'17.3"E》では、原爆が投下された地点から見上げて撮影された空の映像がスクリーンに投影されています。原爆が投下された1945年8月6日の広島は、雲ひとつない晴天であったと言われます。菅は、同様の天候の日を選んでその地点に立ち、原爆が炸裂した上空580mの位置にカメラを介してピントを合わせようとしています。しかし、快晴の空に焦点を合わせることはできず、レンズの運動は空を切って振動音が繰り返されます。展示室の床に示されたQRコードには同地点のストリートビューのハイパーリンクが埋め込まれており、鑑賞者は電子端末を介して原爆投下の座標軸に誘導されることとなります。この作品においても、被爆の瞬間の出来事を想像するための観点（あるいはその出来事と作者・鑑賞者との「距離」）が暗示されており、前述した絵画作品と展覧会の中で対置的に構成されています。

これらの作品は、広島原爆投下から77年目に当たる2022年8月6日と太平洋戦争の終戦記念日である8月15日の期間に発表されます。2022年のロシアによるウクライナへの大規模な軍事侵攻において、プーチン大統領が核兵器使用の可能性に言及するなど、20世紀の世界大戦における悲劇の再来を予見させる事象に対して、世界中の人々が強い危機感を共有しました。世界がそうした混沌の中にある状況において、私たちは歴史から何を学ぶのかという問題が改めて問い直されています。本展において菅が提示する作品は、人類史における様々な悲劇に対して今日を生きる私たちはいかに応答し、またどのように継承していけるのかという、想起の芸術の在り方について再考を促す機会となるでしょう。

【作家経歴】

菅亮平（かんりょうへい）。美術作家。2022年現在広島県広島市在住。近年の主な個展に、「Cube with Eye」（スイッチ・ポイント / 東京 / 2019年）、「As you see it」（ヤマモト・ケイコ・ロジェックス / ロンドン / 2019年）、「In the Walls」（資生堂ギャラリー / 東京 / 2017年）、「Room A.EG_05」（ミュンヘン国立造形美術アカデミー / ミュンヘン / 2014年）、「White Cube」（トーキョー・ワンダー・サイト / 東京 / 2013年）などがある。

アーティストウェブサイト: <https://ryoheikan.com>